

# た な か み 山

第 3 号 行  
発 桐 生 民 具  
ク ラ ブ

## 桐生の地場産業(下)

山あり谷ありとして今日

元大津市会議長 山本佐蔵

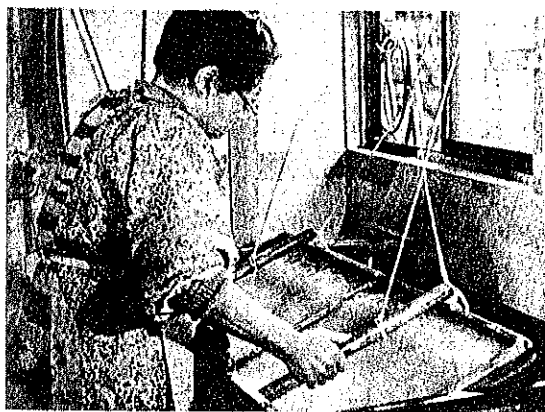
昼は、一秒の油断も許されない紙漉き作業。夜は、雁皮の荒皮はぎとパンカチ作業。

そんな厳しい中にも、夜の女性の作業場は、村の若者の集り場となりさらに、夏の盆踊り。お寺の報恩講と、ふれあいの場は重ねられていくうち愛が芽生え、やがて幾組かのカップルが誕生した。

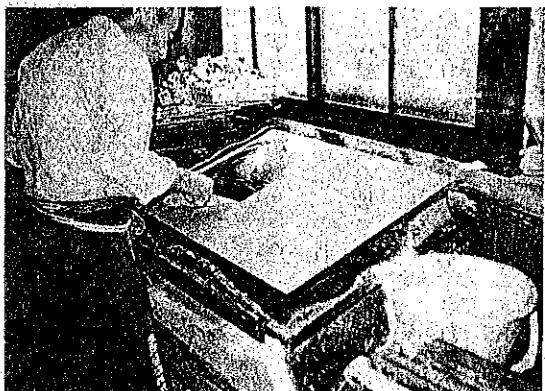
また、反面周囲の人々の頑迷無理

解のために、子どもまでできた仲を裂かれた悲しい情話もいくつか伝えられている。

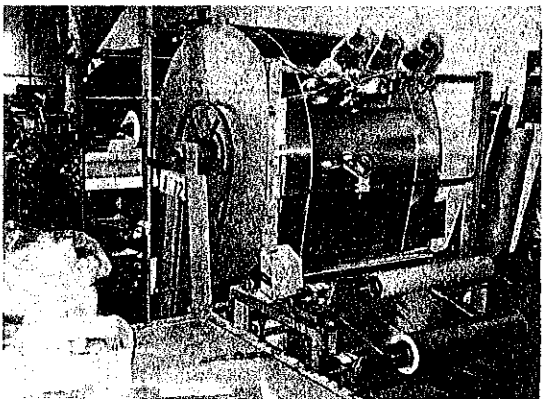
先年、私が県小学校PTA連絡協議会長をしていた時のことである。湖北選出の女性理事Aさんが、「山本さんは、桐生の方でしたね。」と話しかけられた。「私の父は、桐生の○○○という人です。母は、紙漉き屋に奉公中、その人と恋仲となり私



紙漉き



箔押し



貼合わせ工程

が生まれましたが、二人は許されず遂に結婚できなかったそうです。私は、生まれるなり里子に出され、実の両親を知らぬまま成長し、学校の教師となり、今の夫と結ばれ二人の子どもを生み円満な家庭をもって

います。けれども、一度だけでもよい、実の母に逢いたい念にかられています。何か手がかりがあれば教えて下さい。」とのこと。

幸いにも、この出来事は大正の頃だったので、当時紙漉き場のようすを知っている人が生きていたので相談をしてみた。その母なる人は、京都府相楽郡に住んでおられることがわかり、早速Aさんに通知したことを思い出して

いる。

その後、昭和に入って機械製紙の台頭により手漉きは衰退の一途をたどり、一時は、隆盛を極めた手漉き地場産業も次から次へと転廃業。十数軒は四軒に減り、とうとう成子哲郎氏一軒のみとなってしまった。

転業者の大半は、系統産業の箔紙及び金糸製造業に移り、昭和十五年には業者三十をこえ、新しい地場産業を形成した。

一時は、農家の副業として作業に従事する人は千人を数えたが、大東亜戦争により中断。

昭和二十年、世界第二次大戦の終結(日本敗戦)と共に復元再開し、昭和三十年以降の機械化の波に押され、これまた転廃業者続出の中現在の数軒が残った。

業者の数こそ激減したが、用途や販路の拡充、機械化による増産と相まって現在年産五、六拾億円の地場産業となつている。

我がふるさと 作 山本文良  
桐生よいとこ一度はおいで。

①金銀錦の地場産業。

②流れを堰とめ三田六に、

③逆さに映した郡誌天文寺の鐘。

④圃場下水完成なれど、

⑤先人の心ふれあいつまでも。

農村文化資料館

水桶に想う

山本三郎

私たち地球上に生存する万物総べては、一日たりとも水なくしては生活することはできない。

なかでも飲料水については、特に大きな恩恵を受けている。

天地自然の法則とでも申しましようか、自然の恵み、雨量によって一定の地下水等となり、確保されている。目には見えないが、偉大なる大宇宙自然の恩恵を受けていることを忘れてはいないだろうか。

世の中全体が文明化されると、知らず知らず昔の肉体的な労働(水汲みと運搬作業)がなくなり水の大切さも忘れがちになりつつある昨今で

あります。

ちよつとここで昔のこと、今から四十年前までは、どこのご家庭でも大切な井戸があった。

この井戸水は、それぞれの生活の上には絶対必要であった。一戸の住宅建築をするには、まづ先に「井戸掘り」から取組み着手されたのである。

井戸についても、それぞれ特質があった。これは掘ってみなくてはわからないが、

第一に、日照りが続くと井戸水が不足勝ちになる井戸。

第二に、日常使うだけの水はたり

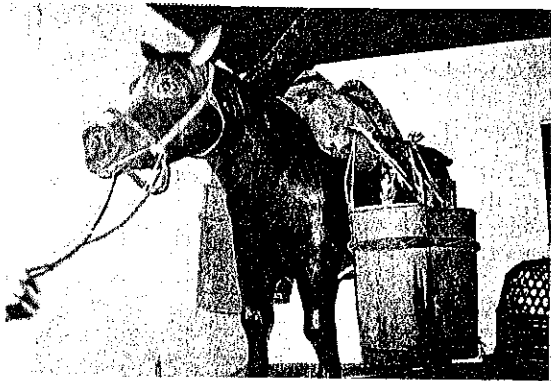
るが、いざ人寄せをすると使用量が多いためにすぐさま不足する井戸。

第三に、どれほど汲み上げても絶対に水が枯れない井戸等がある。

現在五十才以上の方ならば、子どもながらにお風呂の水やその他必要な所へバケツで運んだり、ポンプで汲みあげたりしたことを思い出されるだろう。

さらに八十年ほど前にさかのぼると、写真のように馬の背に桶を四つぶらさげ、貴重な井戸水を補うためきれいな川の水を運んだそうである。

馬の水運び



農家のことだからきつと牛がいたはずなのに馬を使ったこと。

大きくて深い桶の方が水が沢山入るはずなのに、細長い桶を使った。

しかし、そこには理由があり生活の知恵がかくされていた。

苦勞をして汲み運んできた水は、絶対こぼしてはならない。

細くてでこぼこした道。土手や坂のある道。

これを克服するためには、深い桶が必要である。深いと牛よりも背の高い馬の方がよい。

さらに、水量や桶の安定を考える

と片側に一つより二つつるした方が

金勝寺裏参道 桐生辻線の役わり(水)

山本文良

県道大津信楽線の「桐生辻」で車を降りると、急に田んぼが開け四

五軒の農家が見えてきます。道を北側の旧街道に入ると、田上

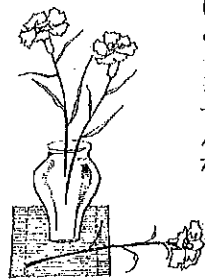
山独特の巨岩がぼこぼこと露出した

禿山が迫り思わず圧倒されます。農家の一軒を過ぎると、二軒目は

戸閉めで無住のようでした。戸数は、全部で七・八軒。殆ど減

っていないようですが、住む人は減つたり変わつたりしています。ここ「桐生辻」は「桐生」の分れ。

「桐生」は「新免」の分れと、昔から言われている。つるべがポンプに変わり、ポンプが水道に発展した今日。すべては夢物語りである。科学の進歩は、すばらしい世の中をつくってくれた。しかし、人々は動かなくなり感謝することを忘れつつある。おたがいに、水の大切さ・ありがたさをもう一度かみしめて、大切に使うではありませんか。



「私で五代目か六代目。」と、古びた過去帳を見せて下さいました。そこには「嘉永二年……。」と黒書

されていきました。西暦一八四九年。今から約一四〇

年前になります。そのころ、当地に新天地を求めて

移住されたものと思われま

す。「親せきは、桐生のAさん・Bさん・Cさん……。」



桐生辻の道標

「隣りの○○○○さんは、桐生のE・F・Gさん……。」

「同級生は、Nさん・Yさんは、どうしているかな。」と、一息ついて

「お寺も桐生の正休寺さん。」

お宮さんはお伺いすると、

「桐生の箭箒神社のご分身です。」

「子どものころは、そうですね。」

もう七十年なるかな。桐生の氏神さんで「お神楽」獅子舞が役年の方々

こま坂・くさつ之みち」に従って、

山越えの石ころ道・曲り道・川越え

をあえぎあえぎ登って行き、峠を越

えると今度は下りばかり。

決して楽でない山道をどんどん駆

けて約二時間かかって漸く辿り着い

た程でした。

そして、また、あの道を帰ったの

です。」とニッコリ。

桐生の山本弥寿一さんも、

「私の母親は、里帰りの日になると三人の子どもと大きな包みを持ってこの道を桐生辻へ行ったものです。」

「淋しくて長くけわしい道を犬の

ように走ったり歩いたり、また休ん

だりして行くと、「逆さ観音」を見せ

たり「こと茶屋」や「狛坂寺」など

の話をよくしてくれました。」

「また、子どもだけでこわごわ桐

生辻まで使に行ったこともありま

す。」と、昔を思い出したかきそう

に話して下さいました。

時から右へ登れば狛坂・金勝寺。

まっすぐ下ると桐生へ出られます。

峠のあちこちには、かつては「茶

店」があり、南無阿弥陀仏と刻んだ

「石碑」もいつのころからか建って

います。

さらに、杉の大き木が生い茂ったと

ころをよく見ると「用水池」や「田

んぼ」であったことがよくわかりま

す。

明治生れの山本誠一さんは、

「この道は大小の刀を腰にさした

おさむらいさんも通られ、それを見

かけたおじいちゃん話してく

れたこともあります。」と付け加えて

下さいました。

峠の茶店は、山本誠一さんのお宅。

金勝寺の別院「狛坂寺」は、明治

二年に解体されて山門は地元の正休

寺へ。僧房は田上天文台へ。さらに

本堂は南山田西光寺へ移築されてい

ます。

また、道標に刻まれているように

「くさつ」へ行く近道でもあったの

です。

「くさつ市」(毎年八月十一日・十

二月二十六日)の盛んな昭和三十年

ごろまでは、大鳥居・桐生辻から柴

や割木をかついで買物に行かれたこ

なくならしましたね。とさら一言。

今も残る 洗い場風景(これこそ宝

山本文良

「へエッ! 桐生は、まだ川で洗

っているの。」と驚きの声。

これは、ある職場での休憩時間の

会話の一部です。

桐生の特徴の一つは、大きな天井

川が二つあり、それに付随してまた

幾つかの小川があることです。

まず、堤防の東側を流れる「フケ

の川」で、草津川(大川)の伏流水

です。

もう一つは、昔の呼び名でいうと

川東に対して川西の裏を流れる「古

川」で、これは山水です。

昔から両方とも、とてもきれいで

飲み水。そして野菜や洗濯物の洗い

ともあったそうです。

また、砂防工事の盛んな明治の中

ごろから約七十年間もなくしてはなら

ない大切な道だったのです。

つまり、この裏参道は「里道」で

あり「街道」であり「仕事の道」で

もあったのです。

今は、保安林となり、田上山のハ

イキングコースの一部になっていま

す。

「セキラン」「水晶」も殆ど見られ

なくならしましたね。とさら一言。

特に「フケの川」は、伏流水のた

め夏は冷たく、冬はあたたかくて遠

くの方々も自転車・バイク・うば車

を押して来られます。

よく見ると、かつての石橋は現代

的な橋に変わっていますが、そこに

使われていた石材は「踏み石」や洗

い物の「置場」となっています。

さらにフケの川の下流では、改修

工事の際新しくコンクリートの階段

を設けて下さったなどこんなところ

にも歴史があります。

これは、天の恵みであり先祖が残

し伝えて下さった宝物です。

大切に大切に、いついつまで

も使いたいものです。

伝統行事にしたい

左義長(火まつり)

桐生子ども会長 山本文和

私の子どもの頃は、隣村の岡本や山寺には「左義長」という火まつりがありました。どうしたことか桐生にはありませんでした。

でも、今の上田上小学校は、毎年やっていて下さいます。

しかし、残念ですが、桐生にはありません。

この桐生に「左義長」火まつりをやってみてはと、子どもや役員さん方に相談をもちかけました。

子どもたちは、両手を挙げ飛び上がって喜び、役員さんたちは新しい伝統を作ろうと賛成してくれました。

いよいよ当日になりました。平成元年一月十五日「元年」と「第一回」。何だか胸にジーンとくるものがありました。

午前中に、火まつりの無事を祈る「お抜い。」をすませました。

午後一時になると、自動車・バイク・自転車に乗ってみんなが集ってきてくれました。作業開始！

子どもたちは、竹・藁・しめ飾り・すすき運びです。男子役員は、鎌・縄を手にやぐらの組み立て。女子役員は、集ったお餅を材料に「ぜんざい作り」です。

みんな一生懸命で、冷たい北風も何のそのでした。

約二時間後。天にも届くほどの見事なやぐらが出来上がりました。

辺りが大分暗くなった午後五時二十分。六年生全員による点火です。

みんなの目は、期せずして一点に集中しています。

「ゴォー。」という大きな音と共に、火は見るみるうちに大空へ向って躍り上がりました。

「万才・万才。」「やった・やった！」と大歓声がおこりました。

しかし、思っていたより早くやぐらが倒れたので、とても残念でした。

みんな、配られたぜんざいやみかんに舌づつみをうちながら「来年は、もっともっとすばらしい左義長にしよう。」と誓い合いました。

火まつり：道祖神(村の安全繁栄を司る)祭り

①・一月十五日(小正月)

・松飾り等を集めて積みあげて燃やす。

・子どもが行事で「ドンド」・「オンベ」・「左義長」という。

②・八月十五日(盆)

・「柱松」・「投松明」等という。

・高い柱を立て、その頂上の籠のたいまつに火を投げ入れてもやす。

③精霊の送り火(例、京都大文字の送り火)

伝統行事(B)

村祭りの原点

山本文良



氏神様のお出まし

毎年五月になると、昔から日本の各地で「村祭り」が行なわれ、老いも若きもとても楽しい一日を過ごしてきました。

まして娯楽の少ない時代は、尚更のことだったようです。

しかし「村祭り」の本当の意味・原点はどこにあるか。誤って解釈されている場合が多いのです。

比えい山延暦寺の僧兵の朝廷への直訴。あれは、神の力を利用したものです。

私たちの村祭りも、神を利用して人々が憩う、そんなものではないのです。

実は、「七夕祭り」と同じように神様が年に一度姫宮様のところへ遊びに行かれるのです。この行列に奉仕するのが、村人であり村祭りなのです。

す。

神様は御輿に乗り、案内役や護衛のもと。のぼり旗・諸道具の入った箱を担がせ、笛・鉦や太鼓で囃したてにぎにぎしく姫宮のお住いお旅所へお出かけになるのです。

このお祭りには、五穀豊穡。村中安全も祈願されます。

あれは、姫宮宅でのご宴会やご寢所ごと。やがて月満ち、姫宮様のご出産にあやかっているのです。

お祭りも時代の流れには勝てず昭和二十年以降、祭日が集りやすい休日に。御輿の重さから担がすに引張る台車に。白たび・わらじか靴下・運動ぐつに。太鼓御輿や子ども御輿の出現と……。進歩することはよいことです。しかし、原点や歴史を忘れてはならないと思います。

坂本日吉神社の山王祭。追分のあまぎけ祭。上砥山の山の神は、民俗学上重要なお祭りです。

お礼

ご投稿、資料提供ありがとうございます。心からお礼申し上げます。今後共よろしく

桐生民具クラブ代表

山本文良

☎〇〇七七

有線五六七八